

高等学校世界史における「主題学習」について

有 田 嘉 伸*

(平成8年10月31日受理)

A Study on the "Project Study" in World History of High School

Yoshinobu ARITA

(Received October 31, 1996)

1 はじめに

平成元年の学習指導要領の改訂によって、高等学校の社会科は地理歴史科と公民科に再編された。平成元年版学習指導要領は、高等学校では平成6年度から学年進んで実施され、平成8年度には、高等学校3年まで新学習指導要領が実施されることになり、高等学校では社会科が完全に消滅した。

新学習指導要領では、世界史は、世界史Aと世界史Bの2科目となり、地理歴史科のなかで行われることとなった。しかも、国際化時代に対応して、A、Bいずれかの科目を必修とすることとされた。社会科世界史と地理歴史科世界史との間には、当然大きな違いがあるはずであるが¹⁾、高等学校の現場では、その違いについては、あまり意識されていないようである。その原因の一つには、社会科世界史の内容構成上、学習方法上の2大特色であった「文化圏学習」と「主題学習」が、ともに地理歴史科世界史にも継承されていることが考えられる。本稿では、「主題学習」の誕生から現在に至るまでの経緯をたどるとともに²⁾、地理歴史科の世界史B教科書における「主題学習」の扱い方を検討する。

2 社会科世界史における「主題学習」の誕生と変遷

(1) 昭和35年版高等学校学習指導要領

「主題学習」が高等学校世界史に登場したのは、昭和35年版高等学校学習指導要領社会世界史Bにおいてであった。それは、従来の通史学習(系統学習)が、羅列的知識の注入におちいりがちで、学習形態も、教師の講義を中心とした生徒の受動的な形態が多く、生徒の興味・関心をそぐ傾向が強いことの反省から設けられたものであった。すなわち、昭和35年版高等学校学習指導要領社会世界史Bは、「内容」の前文に次のようにその趣旨を

*長崎大学教育学部社会科教育研究室

述べている。

「世界史Bは、世界史Aの場合よりも深めて取り扱うものとするが、その際たとえばシルクロードと東西交渉、イギリスの議会政治の発達、西部開拓と南北戦争、露土戦争と列強の世界政策、ワイマール体制とその崩壊などのような適当な主題を選び、政治的、経済的、社会的な観点から総合的に学習させる。それによって、歴史的思考力をいっそうつちかうことをあわせて考慮するものとする。」

また、高等学校学習指導要領解説社会編（昭和36年）では、主題設定の観点3点と、留意点として次のことをあげている。

- 「倫理・社会」や「政治・経済」の学習と関連の深いもの。たとえば、「(2) 人生観・世界観」の学習に関係のあるものや、現代の諸問題を考える際に参考となるもの。
- 政治的、経済的、社会的な観点から総合的に学習できるもの。
- できるだけ世界の地域相互のことがらに関係のあるもの。

なお、主題の配当については、特定の地域や時代に片寄らないよう留意すること。

「主題学習」の導入に中心的な役割を果たした、当時の文部省初等中等教育局高等学校教育科教科調査官の平田嘉三氏は、その意図や経緯について、後に次のように述べている。主題学習の導入の動機は、①系統学習の中にも問題解決学習のもつすぐれた学力観と学習方法を取り入れたい、②確実な情報をもとに、広い視野に立って総合的に考える力を育てたい、③いわゆる第一次安保闘争のなかで、極左、極右への偏向を防止し、平和で民主的な国家・社会をつくりだしたい、などであり、その際、①西ドイツの範例方式、②イギリスのイエラ学習、③日本の自己展開学習に多くのことを学んだ。³⁾と。

昭和35年版学習指導要領に基づいて昭和41年に発行された12種類の世界史B教科書に登場した主題は59におよんだが、⁴⁾このような「主題学習」の意図は、発足後数年たっても、教育現場では必ずしも十分に理解されていなかった。また、従来の通史的系統学習を基本としながら、加えて「主題学習」が導入されたことは、授業時間の不足を招き、しかも、従来の全日制普通科では世界史の標準単位数が5単位であったのが4単位に削減された時点での導入であったことも、現場への定着を不十分なものとした。

(2) 昭和45年版高等学校学習指導要領

昭和45年版高等学校学習指導要領では、「主題学習」は日本史にも登場し、世界史における記述も、昭和35年版より詳しく、具体的となった。すなわち、学習指導要領の「内容の取り扱い」で、次のように述べている。

(2) 「世界史」の目標を達成し、生徒の歴史的思考力をいっそう深めるため、歴史的な流れの学習の中で、適切な主題を設けて指導することが望ましい。その際、次の諸点を考慮して取り扱う。

- ア 主題は、目標の達成、生徒の理解度、教材の効果などをよく吟味したうえで、たとえば、次のような観点などから選ぶことが考えられること。
 - a 政治的、経済的、社会的、文化的、国際的な諸点から、多角的、総合的に学習できるもの
 - b 世界の歴史上の事象について、地域ごとの比較考察的な、あるいは地域相互の関連的な学習のできるもの

c 世界の歴史上の発展を、時代別、地域別にある程度大きくまとめて学習できるもの

イ 「世界史」を3単位で履修させる場合は最低1主題を、また、4単位以上で履修させる場合はそれぞれの単位数に応じて適切な数の主題を設けて学習させることが望ましいこと。

ウ 二つ以上の主題を取り上げる場合の主題の配当については、観点の異なるものを取り上げ、また、特定の地域や時代にかたよらないように留意すること。

(3) 「世界史」に対する生徒の関心を高め、学習効果を上げ、地域や時代における社会と個人の関係を明らかにするため、世界の歴史上の人物を適切に取り上げることが望ましい。また、主題として人物を取り上げ、人物とその時代的背景との関連などを考察させることも考えられる。

また、「主題学習」の登場以来、教育現場で問題とされた「主題学習」と系統学習との関係について、高等学校学習指導要領解説社会編（昭和47年）は、次のように述べている。「主題学習の主要なねらいは、「世界史」の目標を達成し、生徒の歴史的思考力をいっそう深めることにある。すなわち、主題学習においては、いわゆる系統的な学習でつかわれた歴史的な理解を基礎に、指導事項を広げたり、掘り下げたりすることによって、歴史的思考力を深め、生徒の歴史意識をさらに高い認識にまで育てることに、そのねらいがおかれている。そしてこれによって深められた歴史的思考力により、以後の系統的な学習を、より発展的に展開できるように配慮することが期待される。なお、主題学習と系統的な学習とは、ともすれば対比的な学習の方法のようにとられやすいが、「世界史」の学習は、系統的な学習を中心にし、両者が有機的な関連を保ちながらすすめられるものでなければならない。「歴史的な流れの学習の中で、適切な主題を設けて指導することが望ましい。」（「3 内容の取り扱い」の（2））と示されているのは、このような趣旨においてである。」

これにつづいて、「主題選定の観点」「主題数と配当時間」「実施上の留意点」について解説している。このように、学習指導要領における「主題学習」にかんする記述は、昭和35年版よりも昭和45年版の方が格段に充実してきたが、昭和45年版学習指導要領に基づいて昭和47年に発行された15種類の世界史教科書に登場した主題は47であり、また教科書において主題の占めるページの割合も減少した⁵⁾。これは、当時においても、通史的系統学習を重視する考え方が変わっていないことを示している。

（3）昭和53年版高等学校学習指導要領

昭和53年版高等学校学習指導要領では、「主題学習」は、引き続き日本史と世界史において実施された。世界史においては、「内容の取扱い」で、次のように述べている。

(2) 生徒の歴史的思考力を一層深めるため、歴史的な流れの学習の中で、適切な主題を設けて学習させるよう配慮する。その際、次の諸点を考慮して取り扱うものとする。

ア 主題は、生徒の関心や理解度、教材の効果などを吟味した上で、例えば、次のような観点などから選ぶこと。

a 地域ごとの比較考察的又は地域相互の関連的な学習のできるもの

b 時代別、地域別又は国別に、ある程度大きくまとめて学習できるもの

- c 現代の諸地域の社会と文化について、文化人類学などの成果を活用しながら学習できるもの
- d 世界の歴史上の事象と日本の歴史上の事象とを、比較させたり、関連させたりするなどして、世界の歴史におけるわが国の位置について学習できるもの
- e 世界の歴史上の人物について、時代背景や地域の特質との関連などにおいて学習できるもの

イ 主題の配当については、できるだけ観点の異なるものを取り上げ、また、特定の地域や時代に偏らないように留意すること。

高等学校学習指導要領解説社会編（昭和54年）は、「主題学習の趣旨」「主題選定の観点」「主題の配当」「主題学習展開上の留意点」について詳しく述べている。主題設定の観点は、従来の三つから五つに整備され、cのような新しい観点も設けられた。しかし、教科書における「主題学習」の扱いは、全体的には一層軽くなり、かわって「人物」や歴史上のエピソードなどを、「小テーマ」として掲載する教科書が増えたのもこの時期の特色であった。

3 「主題学習」の目的と効用

「主題学習」の目的と効用については、平田嘉三氏やその後継者の元教科調査官であった星村平和氏の論説⁶⁾をはじめ、その他多くの現場の教師によって理論的・実践的な研究がなされてきた⁷⁾。たとえば、昭和35年に「主題学習」が導入されたときの協力委員であった木村茂夫氏は、「主題学習」を導入したときの目的として、次の7項目をあげておられる⁸⁾。①社会科学学習の経験を生かし、生徒の自発活動・自主活動を取り入れる、②学習指導法の改善、③生徒の自主性・興味の喚起、④学習の集約化・能率化、⑤世界的視野の育成、⑥社会科の各科目の統合、⑦文明史論的な見方の導入、などである。

学習指導要領に述べられている趣旨をふまえて、「主題学習」の目的と効用を整理すると、次のような点が考えられる。

(1) 歴史教育の目標上から

- ①歴史的思考力を一層深める
- ②「主題学習」は、高校生の歴史意識の発達段階に適応するものである

(2) 世界史の内容構成上から

- ③通史的系統学習を基本としながら、より分析的・理論的・総合的な歴史学習ができる
- ④教材配列の上で、通史的系統学習では扱いにくかったり、不十分にしか扱えない部分に対する補完的機能を果たすことができる……人物、文化遺産、文化交流圏など

(3) 学習指導法上から

- ⑤様々な学習形態、特に、生徒の調査・研究・発表などによる主体的・自発的な学習を比較的容易に取り入れることができる
- ⑥世界史の膨大な学習内容の精選方法の一つになりうる

歴史的思考力を育成することは世界史学習の根本的な目的であり、系統的通史学習でも「主題学習」でもともに目指されなければならないが、「主題学習」の真の目的は内容構成上からとらえるべきか、それとも学習指導法上からとらえるべきかが議論されたことがある。筆者は、「主題学習」とは当然内容構成上の概念だと考えているが、同時に、「主題学

習」は生徒の主体的な学習方法を取り入れやすいため、通史学習の中に「主題学習」を適当に組み込むことによって、世界史学習の画一化や平板化を防ぐことができるであろう。また、筆者がかつて、「世界史における1930年代」の主題によって、高等学校3年生で「主題学習」を行った際、生徒が「主題学習」の長所・短所としてあげたのは、次のような点であった⁹⁾。

(「主題学習」の長所)

- (1) 因果関係や事件の背景を把握するのが容易
- (2) 世界史を多面的に掘り下げて学習できる
- (3) 歴史の理解が広がり、深まる
- (4) 歴史のたて、よこのつながりがよくつかめる
- (5) 歴史を人間の営みとしてとらえられる
- (6) 受験勉強という気がせず、興味がわく
- (7) 覚える学習ではなく、考える学習ができる
- (8) 日頃あまり読まない本を読むことができる

(「主題学習」の短所)

- (1) 学習が狭い範囲に限定される
- (2) 歴史の全体の流れがつかみにくい
- (3) 生徒の発表による学習では、細かいことに流れやすく、中心がぼける
- (4) 内容が深いだけに、他の人がやった所など、予備知識がないと一層わかりにくい
- (5) 系統的通史学習を前提として「主題学習」をやる必要がある
- (6) 適当な参考書がなく、一般にテーマが難しい。
- (7) こういう詳しい勉強は、大学でやればよい

これらの意見の多くは、「主題学習」の特色を適切に把握したものだといえることができる。

4 平成元年版地理歴史科世界史Bにおける主題学習

平成元年版高等学校学習指導要領地理歴史では、世界史は、世界史Aと世界史Bの2科目がおかれた。世界史Aの学習指導要領には「主題学習」の言葉はないが、世界史Aそのものが、近現代史を中心にしながら、内容を主題的に構成した科目だといえることができる。「主題学習」については、世界史B、日本史Bにおいて継承されているが、学習指導要領世界史Bでは、「内容の取扱い」で次のように述べている。

イ 生徒の歴史的な思考力を培いかつ歴史に対し興味・関心をもたせるため、適切な主題を設けて学習できるようにすること。

また、高等学校学習指導要領解説地理歴史編（平成元年）には、「主題学習の趣旨」「主題設定の観点」「主題学習展開の配慮事項」を次のように述べている。

ア 主題学習の趣旨

主題学習は生徒の歴史的思考力を一層深め、生徒の自発的な学習活動の展開を促すために導入されたものである。この学習の展開を通じて世界の歴史を様々な側面から学び、歴史への興味・関心を高め、歴史に対する一層幅広い、また深い理解を得させようとしている。

イ 主題設定の観点

- ①比較文化または比較文明の視点を導入して歴史を学習できるもの
- ②社会史的な観点を導入し学習できるもの
- ③同時代史としての世界の歴史を学習できるもの
- ④人間の生活や文明を支えた技術についてまとまった学習ができるもの

ウ 主題学習展開の配慮事項

主題学習は、年間指導計画の中に適切に位置付けられていることが必要である。またいくつかの主題を選定する場合は特定の時代や地域に偏らず、観点の異なるものを用意するなど、様々な視点から学習できるよう配慮する。

平成元年版では、学習指導要領における記述が簡略化され、主題設定の観点も「解説」の方に移されているが、そのことが直ちに「主題学習」の軽視につながることはない。むしろ、より多様な主題による、教育現場での意欲的な実践が求められているのである。

5 地理歴史科世界史B教科書における「主題学習」の取り扱い

平成元年版学習指導要領に基づいて、平成7年度に発行された世界史B教科書は18種であった。それらの教科書における「主題学習」の取り扱い方を比較したものが、巻末の「付表」である。

18種中、「主題学習」と明記して、各主題ごとに1～2ページにわたって文章を記載している教科書は、F, G, H, K, M, O, Qの7種で、主題数は延べ21である。A, B, Dは「主題学習について」として、その趣旨と主題設定の観点をあげているが、具体的な主題についての文章は載せていない。その他の教科書では、「主題学習」とは称していないが、Iの「歴史への視線」、Lの「歴史への扉」、Qの「民衆の歴史」などは主題に準ずるものと解することができる。その他、「コラム」「テーマ」「トピック」「特集」などとして、主題的・解説的なページを置いている教科書が、B, C, E, F, J, K, N, Oなどである。特にOは、通史的な記述の「概観」が22であるのに対して、主題的な記述の「テーマ」が66あり、主題の束によって構成された教科書といえることができる。またFも、通史的本文は左ページに限り、右ページはすべて「解説」「特集」「人物」のタイトルで主題的・解説的記述とするユニークな構成になっている。逆に、主題的な記述をまったく掲載していないのがPである。Cの「トピック」、Gの「テーマ」、Rの「囲み」はそれぞれ1ページに満たない解説的な記述が多く、より詳しい注、または中間文的な色彩が強く、「主題学習」には使いにくい記述である。

教科書に表れた主題やテーマを観点別にみた場合、特に顕著な特徴はみられない。学習指導要領解説があげている「比較文化・比較文明的観点」「社会史的・生活文化的観点」「同時代史的観点」からの主題がほぼ同数みられ、それに次いで「歴史の変遷をたどる」主題が多い。「人物」を中心にすえた「主題学習」はないが、E, Fなどは解説的に人物を扱ったページをおいており、Kはそれを二人の対照的な人物の比較として扱っている。

教科書における「主題学習」の位置付けは、学習指導要領における簡略な記述を反映しているか、教科書の執筆者によるより柔軟な解釈が行われ、教科書の記述が多様性をもってきている。しかし、どの教科書を使用するにしても、通史的系統学習は教科書を中心に学習が進められることが多いが、「主題学習」を展開する場合は、教科書のみでは学習を行う

ことができず、教師の独自の教材研究や授業設計が不可欠である。そのため、教科書の記述だけから、「主題学習」の現場における受入れの程度を判断することは不可能である。

6 終わりに

「主題学習」は、その趣旨や意義は認めながら、教育現場ではなかなか実施されない学習である。それは、教師が、歴史においては近現代史が重要だといつも口では言いながら、日本史や世界史の学習が近代以前やその途中で終わってしまうのと似た所がある。また、多くの教師や歴史学者の考え方のなかに、歴史学習の基本は通史学習であるという強い考えがあることによる。たとえば、遠山茂樹氏は次のように述べている。

「歴史学習の系統性を論ずる場合、原始・古代から現在にいたるまで時代をおって順次学んでゆく通史学習の系統だという考えが前提となっている。」「なぜ、歴史的認識を育てるのに通史学習が必要か、一言でいえば歴史の因果関係は連続的であるからである。原因が結果を生み、その結果が、次の結果の原因となっているのである。だから古代社会の構造と矛盾がわからなければ、その解体の原因はわからないし、次の封建社会の構造の特質を理解するためには、古代から封建への移行期の歴史の動きを知る必要がある。時代を追って歴史を認識する必要があるという学問上の理由は、また単純なものから複雑なものへの論理的系列が、歴史展開の原始・古代から現代への時間的系列に照応することからする教育上の理由とも結びつく。国家という概念をえささせるのには、いきなり複雑な構造をもつ現代国家を考察させるのではなく、原始から古代への移行期における、成立期国家の単純な形をまず理解させ、ついで比較的複雑な構造をもつ封建国家、さらに一段と複雑さを増す資本主義国家の学習へと進むことが、教育上からも妥当なのである。したがって右（＝上）の点から導きだされるのは、次の二点である。

(1)本格的な歴史学習は、かならず通史学習でなければならない

(2)通史学習は、原始から現代へと、時代をおって順次学ばせる

ことである。時代の順序を変えて教えたり、中途の時代を飛ばして教えるのは通史学習にならないし、本格的な歴史学習とはならない。」「通史学習でないものは、歴史教材のまとまった学習であっても、歴史の発展過程を学ぶことを目的とするという意味での、本格的な歴史学習ではないとすべきである。」¹⁰⁾ と。

このような考え方をもつ人は多い。しかし、このような考えを脱却しないかぎり、通史学習に先がけて「主題学習」を行うことは不可能である。系統的通史学習を終えたのち、時間が余れば「主題学習」を行おうという立場を取るかぎり、教育現場での「主題学習」の定着は困難であろう。通史学習のなかに、適宜「主題学習」を挿入しながら、計画的に「主題学習」を行うことが必要であろう。

注

- (1) 社会科歴史と地理歴史科歴史の違いについては、有田嘉伸「社会科歴史と歴史科の違いは何か」(社会認識教育学会編『社会科教育学ハンドブック』, 明治図書, 1994), 有田嘉伸「歴史教育の諸問題・論争点」(社会認識教育学会編『地理歴史科教育』, 学術図書出版, 1996)などを参照。
- (2) 「主題学習」についての歴史的考察については、山本一成「高等学校『世界史』における主題学習に関する一考察(一)・(二)——系統学習との関連を中心として——」(『世界史の研究』260・263, 山川出版社, 1977), 松田至弘「現行『世界史』主題学習の背景——主題学習の研究と実践の歩み——」(松田至弘著『世界史学習の研究』, 教育出版センター新社, 1978), 藤井千之助「歴史教育論攷2——歴史教育における『主題学習』について——」(『広島経済大学経済学会研究論集』第13巻第3号, 1990), 川口靖夫「地理歴史科『世界史A』と『主題学習』」(社会系教科教育研究会編『社会系教科教育の理論と実践』, 清水書院, 1995)などを参照。
- (3) 平田嘉三「嵐の中で」(『現代社会科教育実践講座』第20巻, 現代社会科教育実践講座刊行会, 1994, p247)。ほかに、平田嘉三「『主題学習』の登場——いま、再び要請されているもの——」(『改訂版高等学校世界史——指導と研究——』, 第一学習社, 1990)も参照。
- (4) 藤井千之助・永井滋郎「世界史Bにおける主題学習と歴史的思考力」(『研究紀要』第12号, 広島大学教育学部附属高等学校, 1967)。
- (5) 藤井千之助・有田嘉伸「世界史における『主題学習』の取り扱いについて」(『研究紀要』第19号, 広島大学教育学部附属高等学校, 1973)。また、昭和45年版学習指導要領に基づいて昭和54年に発行された17種の世界史教科書における主題学習の取り扱い方と主題例については、有田嘉伸「主題学習『世界史』における1930年代』の実践」(『研究紀要』第24号, 広島大学教育学部附属高等学校, 1979)を参照。
- (6) 星村平和「『世界史』における主題学習(星村平和著『新しい歴史学習の構想』, 東京法令出版, 1980)。
- (7) 「主題学習」の文献については、川口靖夫著『世界史教育関係文献目録(稿)』(私家版, 1994)を参照。
- (8) 木村茂夫「主題学習の誕生と展望」(前川貞次郎・木村尚三郎・平田嘉三編『双書新しい世界史教育』2, 明治図書, 1972, p11~13)。
- (9) 有田嘉伸「主題学習『世界史』における1930年代』の実践」(『研究紀要』第24号, 広島大学教育学部附属高等学校, 1979)。
- (10) 遠山茂樹「歴史教育系統性論の前提」(遠山茂樹著『歴史学から歴史教育へ』, 岩崎書店, 1980, p95~97)

(付表) 地理歴史科世界史B教科書(平成7年度発行)に

発 行 所	教 科 書 名	主 題 数	主 題 の 位 置 と 活 字	主 題 大 活 本 文 と 同 号	中 活 中 間 文 と 同 号	小 活 中 間 文 よ り 小 号	◎ 主 題 と し て 記 載	○ 「コ ラ ム」 「テ ー マ」 な ど と し て 記 載
A	山 川	詳説世界史	0	巻頭・中活	「主題学習について」として主題選定の観点の5類型をあげる			
B	山 川	高校世界史	0 (10)	巻頭・中活	「主題学習について」は詳説と同じ他に「コラム」10を章末におく			
C	東 書	世界史B	0 (22)	章中・中活	「トピックス」22			
D	山 川	新世界史	0	巻頭・中活	「主題学習について」として主題選定の観点の6類型をあげる			
E	東 書	新選世界史B	0 (7)(13)	章中・中小活	「テーマ」7・「人物」13			
F	山 川	世界の歴史	4	章末・大活	他に「解説」51、「特集」23、「人物」17			
G	実 教	世界史B	2	部末・中活				
H	三省堂	三省堂 世界史B	3	部末・中活				
I	三省堂	詳解世界史B	0 (6)	編末・中活	「歴史への視線」6			
J	実 教	高校世界史B	0 (12)	章中・大活	「テーマ」12			
K	第一	高等学校 精選世界史B	3 (6)	章中・大活	他に「テーマ」として人物比較6			
L	三省堂	世界史B	0 (33)(11)	章中・中活	「歴史への扉」33 「文化への扉」11			
M	第一	高等学校 世界史B	4	章中・中活				
N	一 橋	世界史B	(66) (4)	章中・大活	「概観」22, 「テーマ」66, 「文化の窓」4			
O	第一	高等学校 新世界史B	3 (18)	章中・中活	他に「テーマ」18			
P	清 水	新世界史B	0					
Q	清 水	詳解世界史B	2 (7)	章中・中活	他に「民衆の歴史」7			
R	帝 国	図説世界史B 最新版	0 (35)	章中・小活	「囲み」35			

おける「主題学習」の取り扱い方と主題例

[illegible]

[illegible]

[illegible]